
幻夢抄録 目覚め 12章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 12章

【Zコード】

N1043A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

胡国・皇后に影で仕える紫嵐は、主が、母の『形見』ともいえる、勾玉を持っているのに違和感を感じる。一方、氷魚と瑪瑙は、敵国・胡国の皇太子である、居候の天河の正体を隠そうと必死に立ち回っていた。人々の思いが、複雑に絡み合つ…異界が舞台の、壮大スペクタクル！

形見（前書き）

いつも、維月です。
これからどんどん、話が盛り上がりていきますよ。
でも…紫嵐と、その主のやりとり、かなりヘビーです
ですが、まあ、楽しんで読んでくださいな

形見

宮殿内、早朝。

「紫嵐、奥方様がお前を呼んでいるぞ」

背後から、いきなり声をかけられて、彼女は飛びあがつた。振り向くと、そこには、自分の主付きの、侍女がいた。

「わ、分かった、今行きます」

「分かつたのなら、早くお行き、奥方様は忙しいのですよ…お手を煩わせるんじゃありません!」

「はいっ!」

紫嵐は、一瞬にして体を歪ませ、その場所から焼き消えた。彼女が行つてしまつてから侍女は、一つ鼻を鳴らして、ぼそりと呟いた。

「フン…所詮、滅ぼされた、蛮族の生き残りめ。奥方様のお情けなしでは、生きてゆけぬ下賤よ」

「はい、奥方様…お呼びでしょうか」

紫嵐は、息も切らせずに、主の前に傳ぐ。

そんな彼女を、甲高い音楽的な声が迎えた。

「ああ紫嵐、お前に見て貰いたい『物』があつて、呼んだのですよ。この、勾玉を、ね」

「それは!?」

血の色の「じ」とく、赤く、つややかなその宝玉に、紫嵐は戦慄した。それは昔、自分の母が、肌身離さず、身につけていた物だったからだ。

紫嵐の反応に、彼女の主は、いやらしく、口許を歪める。

まるで、その反応を、待っていたかのよ。

「ああ…これは昔、友だつた、お前の母から貰つた物です、どうか、しましたか? 紫嵐」

「い、いえ… よく、お似合いで」わざわざ

「まあ、嬉しいこと」

「奥方様…」

紫嵐は、気取られぬよう、主の様子を伺う。

主の、自分をここに呼んだ思惑が、今ひとつ、分からなかった。

「ときに、天河の行方は、つかめていますか?」

「はい、現在、私ども総出で、捜索しております」

「そう… 分かりました、下がりなさい」

「御意に」

音もなく、紫嵐が去つてすぐ、彼女の主は、小さく呟いた。

「紫嵐め、気づいたのか?いや、まさか…な」

紫嵐の中で、記憶の断片がちらつく。

それは、忘れもしない『あの日』のものだ。

燃えさかる、家屋の残骸 逃げ惑い、殺される者の断末魔。

そして、憎悪に歪んだ 女の、顔。

刀、飛び散る血。

(似ている?いや、そんな筈はない、筈だ)
似て、いた?

あの時は、自分も幼かつたし、見間違いだらうか?
しかし妙だ。

始終、母の側から離れなかつた自分は、一度たりとも、奥方様など
見たことはなかつた。

あの時を除いて。

なのに、なぜ主は、母の勾玉を持っているのだらう?
分からない。

同時刻、氷魚は、食卓で盛大なため息をついていた。
ことある毎に、瑪瑙と天河が、ぶつかり合うからだ。
今も、一つのおかずを巡つて、ケンカしている。

「『ラつ、てめえ居候の分際で、食い過ぎだー。』

「えー、いいじゃん別にい」

堪えていた氷魚に、ついに青筋が浮く。

「ああもう、うるさいいつ！ケンカなら、外でしてつ

氷魚は、テーブルを強打して怒鳴つた。

「す、すまん…氷魚」

「つたく、てめえのせいで、叱られちまつただろが」
しゅんとする天河の脇を、瑪瑙は小突く。

「あたし、終わつたから、先行くからね？」

食器を流しに下げて、台所を出て行く氷魚を見送つて、天河はぼつりと呟いた。

「…瑪瑙」

珍しく名前を呼んだ天河に、ほつゝと片眉を上げてから、瑪瑙は目を合わせた。

「なんだよ」

「しつこい男は、嫌われるぞ、じゃね」

「んなーう、うるせえつ、余計な世話だつ！」

含み笑いをして、台所を出て行く天河に、瑪瑙は憤慨した。

「はあ…お母さん、もう聞いてよ、瑪瑙つたら、ホントに子供くさいんだから！」

氷魚は、母の墓前で愚痴つていた。

一本の刀についた朝露が、朝陽を含んで、キラキラと光る。

一頻りの風に、氷魚は、髪を押さえた。

「お母さん…あたし、どうしちやつたのかな？別にね、どこか悪い訳じやないんだけど、最近、なんかヘンなの」

「へン、つて？」

「え！？」

突然、返ってきた返事に驚いて、氷魚は、後ろを振りむいた。

「天河！？ダメじやないつ、勝手に出てきちゃ…いくら村はずれと

はいえ、誰かに見つかつたら、どうするの！」

「だーい丈夫、気配も、妖氣も今は発してないし、俺の変化は…よ
つぱど鋭いヤツじゃないと、見破れないよ」

「もう！びっくりしたわ…」

やつぱり楽しそうにする天河を、じと田で見てから、氷魚は言った。

「ごめん、ここ…墓だつたんだな」

「うん…母さんと、兄さんのだよ」

俯き加減に言つた彼女に、天河は、はつ、と息をのんだ。

「どうしたの？天河」

「いや、なんとなく歩いてたら、氷魚がいたから…」

「そつか…さてと、戻ろつか、瑪瑙一人、置いてきちゃつたし」

笑顔で言つたつもりだが、声が、震えた。

「涙…」

天河は、氷魚の頬を伝う涙を、そつと指で拭つてやる。

「え、やだなあ…どうしてだろ？涙、出ちゃう」

「氷魚、そなた…独りなのか？」

独り、そうだ。

確かに、自分には、家族がいない、奪われてしまった。

けれど

氷魚は、ふるふる、と首を横に振つた。

「『独り』だけど、だけどね？あたしは一人じゃない、瑪瑙も、村の人たちも、天河、あなただつていってくれるもの…寂しくなんかいわ」

につこりと笑いかける氷魚に、天河も、はかなげに微笑んだ。

「お前は、強いな…さて、戻るか。でも…一緒に戻つたら、まだどうされそうだが」

「そうねえ…」

一方その頃、家に一人残された瑪瑙は、榻ながいすにふんぞり返り、愚痴をこぼしていた。

「つたく… アイツ、気にくわねえ」

アイツとは、もちろん天河のことだ。

歩調荒く、砂利を踏む足音が近づいてくる。

瑪瑙は、氷魚が戻ってきたと思い、目線だけを扉に向かって。
しかし、蹴破る勢いで、玄関のドアが開く。

そこにいたのは

「はいはい、お邪魔するよー父さんから、話聞いたよ。嫁をもうひつたつて？」

「か、母ちゃん!/?なんだよ急に！」

そこにいたのは、瑪瑙の母だった。

「お前にも、ヒト並みのことができたんだねえ、驚きだよ」

「あ、あいつ、今いないんだよ…悪いな」

瑪瑙は、慌てて理由を取り繕う。

冷や汗が、一筋、背中を伝つた。

(ま、まずい… アイツがいるの、バレちゃうじやねえか!)

「あ、そう…じゃあ戻つてくるまで、待たせてもらおうつかね」

「いや、だからさ…」

「そうだ、こうこうヒトだったよ…」のヒトが。

瑪瑙は、がくり、と肩を落とす。

「柘榴の妹なんだってね、どんな子だい?」

「どんなつて、カワイイよ

「へえ

」

そんな時、扉が開き、氷魚が顔を覗かせた。

「ただいま…あら、お客様さん?」

「あつ、ああ…母ちやんだ、お前に会いたいって。入つてこよ」

「う、うーん。なんか、緊張するなあ」

笑つてみせてから、氷魚は、玄関のドアを閉める。

その顔は、少し、引きつっていた。

「ほらゆりやん、氷魚だよ」

「ど、どいつも、氷魚です…」

はにかんで、氷魚は笑う。

しかし瑪瑙の母は、氷魚を前にして、竦みあがつた。

「宵華！？」

「え？」

「あ、いや、ごめんね…あなたが、あの子の娘かあ、あの時は、どうなるかと思つたけど、よく戻つてきたね…おかえり」

「あ、あの…泣かないでください」

急に泣き出した彼女に、氷魚は、困つたように話しかけた。

「「めんね…年を取ると、どうも涙もうくてね」

瑪瑙の母は、目尻の涙を、指で拭つてから笑つた。

「つくしゅん！」

突然、会話を割つたくしゃみに、氷魚は、天河を外に待たせていたのを思い出した。

「いけない！外に出しつぱなしだつた！」

「どうしたんだい？」

不思議そうに、瑪瑙の母は、首を傾げる。

「居候さんなの、「ごめーん天河つ、早く中に入つて！」

「あ もう、いわんこつちやねえ！」

氷魚が、天河を引っ張り込んだ瞬間、瑪瑙は呻いた。

「どうか、したのか？へんな顔して」

天河は、相変わらず脳天氣に聞いてくる。

「いいのよ瑪瑙、大丈夫だから、今は…」

「あらあら、まあ…」

瑪瑙の母は、興味深げに、じつと天河を見た。

「どうも、天河つていいまして、ここで厄介になつてます
あつからかん、としている天河。

その脇で、瑪瑙は、氷魚になだめられていた。

「へえ、旅人さんなの…どこから来たんだい？」

「ああ…北です、この辺りは、気候がいい」

「やつがい、それにしても、珍しい髪をしていろよ、キレイだねえ」

「ははは…」

渴いた笑いが響く。

まさか、化けている、なんて言えない天河である。
話しあわせっこ、いそいそと部屋に引っ込んでいった。

「あんたは幸せモンだよ、瑪瑙、いい娘を貰ったね」

「ああ… まあな」

照れて、顔をそむける瑪瑙に一つため息をついて、彼の母は、嬉しく笑った。

「娘ができるなんて、嬉しいねえ、ウチは野郎ばっかりだから。でもさ… 氷魚ちゃん、ホントに、この子でいいの？ この子、バカよ？」

「ばつ！ 余計なこと言うんじゃないっ！」

「余計じゃなくて、ホントのこと言つただけさね」

からから、と明るく笑う彼女に、氷魚は、いつの間にか、緊張が消えていた。

「やれやれ、忘れ形見というか、なんというかねえ… もて、それもう帰るとするかな」

瑪瑙の母は、腰掛けっていたテーブルから、腰を浮かせる。

「おひ、さつさと帰れよ」

「口う、瑪瑙つたら、なんすこと言つの？」

氷魚は、慌てて瑪瑙を窘めるが、彼女は、気にした風もなく、明るく笑つた。

「ああ、いいのいいの、この子… いつもこんなだから」

「もう、瑪瑙は… 今日は、わざわざありがとうございます」

「いいや、じやあ、気が向いたら、ウチにおこでよね、歓迎するよ

」

「はーー」

氷魚は、面倒くさがる瑪瑙を玄関先まで引きずつて、彼女を見送つた。

「いい、お母さんだね」

「そつかあ？単に、世話焼きなだけだろ」

「意地つ張り」

くすくす、と笑う氷魚を、瑪瑙は、抱き寄せて言つた。

「さつきは…悪かつた」

「うん」

視線が絡まり、互いの唇が重なりあう。

しかし、甘やかな雰囲気を、またも天河が破つた。

「もしもーし、なんか、忘れられて悔しいなあ」

「て・めーえー…何度も、何度も邪魔ばつかしくせつやがつて

」

再び、険悪な雰囲気が復活し、氷魚は、額を押された。

「やつぱり、どつか行つちやおつかじら

真実の輪舞（ロハム）（前書き）

主との間に、軋轢を感じていた紫風。〈br〉そんな彼女を、予想だにしない真実が襲つた！〈br〉異界が舞台の、壮大スペクタクル。〈br〉『幻夢抄録』目覚め 12章。ここに――。

真実の輪舞（ロンド）

風が、まだ家屋の残骸の残る、焼け野を滾つていく。

紫嵐は、一人、佇んでいた。

「母上、あたしは…信じたく、ありません」

風の中、彼女はぽつりと呟いた。

『あれ』は間違いなく、母の勾玉だ。

（主さまが、それを持っていた、といつのが意味するのは…）

「まさか…」

突然、背後からした唸り声に、紫嵐は慌てて身構えた。

「ゴウコ！？」

田の前に現れた、人面の猪
ゴウコは鼻息荒く、地面をかい
た。

紫嵐は、後ずさる。

自分でも、敵うかどうか、分からぬ相手だからだ。

「ほお、お前…妖猫の長の所の、娘つ子かあ？」

高いとも、低いともとれない、嗄しゃがれた声が言った。

「なつ、なぜ、ここに来た！」

「ふつ…お前も愚かよの、眞の敵に仕えるとは。お前の母上が生き
ていたら、どう思つかのう」

ゴウコは、ちりぢり、と小さな田で紫嵐を見てから、嘲笑うよつ
つ、鼻を鳴らした。

「う、うるさい！？あたしの質問に答えりつ」

核心をつかれた紫嵐は、声を荒らげる。

「あの女は、お前の母を殺した…ただの氣まぐれで、滅ぼされたと
知つても尚、あれに仕えるか？」

「なに、今…なんて言つた！」

しかし、それには応えずに、ゴウコはゆっくりと、向きを変え始め
た。

「懐かしい匂いがしたので来たまで、まあ…お前も気をつけないとだ。殺されぬようになあ」

地響きをたてて、去つていぐゴウコを見送り、紫嵐は、強く拳を握りしめた。

爪がくい込み、地面に、点々と赤い零が落ちる。

「奥方様が…敵！？」

紫嵐は、空間を歪めて、砂塵と共に消えた。

「紫嵐めえ…あ奴、やはりつ」

水晶玉を覗いていた紫嵐の主は、卵大の水晶玉を握りしめる。小さな亀裂が走り、ついにそれは、音をたてて砕け散った。

「紫嵐、来なさい、お前に話があります」

夕餉の後、部屋を出ようとした紫嵐を、彼女の主は呼び止めた。

「おそれながら、奥方様…私からも、お話がござります」

「そ…そつ、では行きますよ」

「は」

紫嵐の主は、そつと、帯の間に刀を差したのだった。

「奥方様、ここは？」

夜風が、紫嵐の茶髪の一房をさらつていぐ。

「お前は…気づいてしまった」

崖の先端に立つて居る主は、谷底に、小石を蹴落としながら、呟くように言った。

谷底には、魚も棲めない、急流が流れている。

紫嵐は、身構えた。

「奥方様、やはりあなたが…あなたが母をつ」

「あれは、ただの狩りでした…その中に、お前たち母娘がいただけのこと。気の毒なことをしましたね」

紫嵐は、歯を食いしばった。

この女は、自分を騙していた。

ずっと、信じていたのに……！

優しい言葉をかけてくれた恩で、ずっと仕えてきた。

彼女の為なら、どんなこともした。

間者、暗殺。

なのに……。

主の口から紡がれる言葉は、憐憫のかけらさえ、感じられない。ついに、紫嵐の目には、涙と、憤怒が宿った。

「奥方様、あなたは！」

瞬間、鈍い衝撃を感じて、彼女は一つ、瞠目した。

なにが起きたのか、分からなかつた。

深々と、胸郭を貫く、一振りの刀。

紫嵐の口許を、血が伝つた。

「な、に！？」

「お前など、もう必要ありません。母のもとへ、行くがいい！」

底冷えのする瞳が、きごりりと紫嵐を睨みつけた。

刀身が、引き抜かれる。

紫嵐は、しぶく血糊の中に、横倒しに倒れた。

衣の裾を、翻して去つていいく主に、必死に手を伸ばす紫嵐。

しかし、その手が、主に届くことはなかつた。

「ちくしょ……ちくしょうつ……！」

（母上、あたしは、なんて愚かなことをしてしまつたんだろう、な

震える足で、なんとか立ち上ると、紫嵐は豹に姿を変えて、漆黒の夜空に消えていった。

（……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043a/>

幻夢抄録 目覚め 12章

2010年10月14日12時03分発行